

◆連載-Vol.15

# 現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



## 執筆者プロフィール

**中谷 正人** (なかたに・まさと)  
1948 神奈川県生まれ。1971 年千葉大学建築学科卒業、『住宅特集』『新建築』編集長を経て1994 年からフリー編集者。1999 年～2014 年千葉大学客員教授。木の建築フォーラム理事、日本建築学会建築文化事業委員会幹事

## 戦後の始まり

### 簡単にこれまでのまとめ

ようやく第二次世界大戦まで駆け足で建築の歴史を見てきた。思った以上に時間がかかってしまったのは、少しでも考えを正確に伝えようとしたからで、決して建築史概論をブツブツもりではなかったのだが…。

ともかく、改めて記しておきたいのは、20世紀初頭まで、建築は豊かな表情を持っていたということであり、それが都市に豊かな表情を与えているという事実である。このことを改めて実感したのが、今年の2月後半から約1カ月ほどアルゼンチンに滞在した時であった。

アルゼンチンは南米のパリとまで言われ、都市計画はパリを参考にすると、観光案内でも言っていた。実際に地図を見ても街区は100mのグリッドでしっかりと構成されており、所々には道路が斜めに走って、まさにパリの市街を彷彿とさせる。

アルゼンチンの人たちがいる場所を指すのに、ここから何百m、とはっきり言うので驚いたのだが、要は1ブロックが100mであるところからきているのだ。

ブエノスアイレスの2月後半は晩夏であり、連日30℃を越す暑さで陽射しも強く、滞在中に一皮むけてしまうほどだった。街路樹は夏の陽光を十分に遮るほどに大きく繁茂し、市内のあちこちに散在する広い公園は老夫婦や家族連れが散策し、のどかでゆとりのある風景だった。

街並みに目を転じれば、1900年代初頭の建物が建ち並び、パリという比喩も決して嘘ではないとは思のだが、一方でモダニズム建築もそこかしこに建てられている。初期モダニズム建築ならば白いグリッド状の柱梁がファサードに表現されており、そんな建物はほぼ例外なく窓毎に室外機が取り付けられている。後期モダニズム建築は全面ガラス張りで室外機は見えないが、いわばノッペラボーだ。

歴史的な建物はひとつひとつ目を惹くだけの魅力を備えているのだが、モダニズム建築が現れると目は勝手に通り過ぎてしまい建物に留まらない。これはいったいどうしたことなんだろうか。

学生時代以来、現代建築こそ建築本来のあり方で、様式建築などは装飾過多で現代的ではない。現代建築はレス・イズ・モアでありシンプルであること、機能的であることこそが美しいのだと、そう思い込んできた。ひょっとしたら、そ

のように洗脳されたのかもしれない。

そんなこんながあって、改めて建築のあり方を考えてみようかと決意したのであった…。

### 住宅を取り巻く環境

さて、本論に戻ろう。

第二次世界大戦が終わり、日本の主要都市は東京をはじめ空襲で焼け野原と化していた。物資もない金もない、未来も展望もない、ないない尽くしの世の中でも、日本国民は諦めはせず、戦後の闇市などは活況を呈していた。

戦後いち早くメディアに取り上げられた建築は、坂倉順三や前川國男などの洋行帰りや、国内で連綿と建築に取り組んでいた村野藤吾、吉田五十八、谷口吉郎、吉村順三などで、皆1900年代ひとケタ生まれの世代であった。

前川は戦後すぐ、新宿に木造の「紀伊国屋書店」を設計し、ざら紙だった『新建築』誌上で紹介されている。(戦中に雑誌の統廃合が行われ、建築雑誌としては『新建築』が唯一存続していたが、昭和20年(1945)には紙不足で休刊となり、戦後復活したものの、紙を選ぶこともできず、ざら紙となったのはまさに時代を反映していた)

1947年には谷口が中山道木曾路馬籠の宿に「藤村記念堂」を設計し、49年には前川がプレハブ住宅ともいべき木造の「プレモス住宅」を発表。

このころは世相を反映して多くの建築家たちが最小限住宅に取り組み、1950年には池辺陽が立体最小限住宅を、52年には増沢洵が自邸を最小限住宅として発表。

戦後の復興を目指して日本中が必死になって働いていた時期である。社会体制は天皇制から民主制へと大きく変わり、財閥は解体され、農地は小作人に解放された。だから社会は混乱してはいても大改革が可能な時期だった。

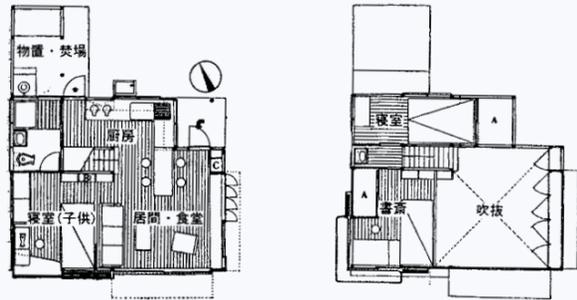


図13 住宅No.3「立体最小限住居」 1,2階平面図  
出典：『戦後モダニズム建築の極北—池辺陽試論』彰国社



①ブエノスアイレスのメインストリート、片側11車線の「7月9日大通り」。1回の青信号で渡りきることはできず、中央分離帯で一休み ②ブエノスアイレスの全景。このスカイラインや表情をパリになぞらえてよいものかどうか… ③緑影濃いサンマルティン将軍広場 ④ブエノスアイレスの旧市街と新市街を結ぶカラトラバの橋 ⑤新米、繁華街の一角。正面のストライプの柱があるビルは商業施設で、街区のコーナーには骨組みだけのドームが載っている ⑥1887年に竣工した建物の一部で、現在は水道局が使用している ⑦窓ごとに室外機が設置された現代建築 (写真：筆者撮影)

にもかかわらずそれを実感し、その意味を理解していた庶民がどれだけいたのかは多少疑問である。庶民は食料を手に入れるだけでも大変な時代であった。そのような時代背景の中で最小限住宅の意味を考えなければならない。

たとえば、池辺の立体最小限住宅は小さいだけではない。定尺の4m材を余すところなくとことん使い回している。おそらく無駄になったのは鉋屑と大鋸屑ぐらいではないだろうか。それだって現場で燃やして暖房に使われたに違いないから無駄にはならない。

そのような時代背景から、最小限の資材で安全性を確保するための最低限の基準として筋交が必要とされたはずだ。伝統的な構法ならば柱梁だけに耐力を負担させるのではなく、全体がトータルなシステムとして壊れない家になっていた。

垂直荷重は柱梁で受け、水平力は筋交でという単純な役割分担ではない。柱梁の間にある土壁の中には竹の木舞が格子状に編まれ、木舞は貫と一体になっており、貫は両側の柱を結んでいる。

平常時に土壁はたいした役には立たないかもしれないが、地震などの水平力が発生すると、変形する柱梁の動きを抑え、土は崩れながら力を吸収、減衰させる。

揺れがなくなれば竹の弾力によって元に戻ろうとする。木材も弾力があるから、やはり元に戻る。振動がある間は揺れているが、振動が収まると建物の変形も元に戻る。ただし土壁の崩れた部分には隙間が空いてしまうが、これは後で補修すればよい。

重い瓦屋根は変形を最小限に抑えるための重石である。また、もともと瓦は固定されてはいず、揺れが大きいと勝手に滑り落ちてしまい、家への負担を軽くしている。

ところが、筋交いが入っているところはいかない。変形しないように踏ん張れるだけ踏ん張るのだが、力尽きると一気にクラッシュする。まして基礎と土台が緊結されていると逃げようもなく、全体が強引に揺すられてしまう。だからこの場合には屋根は軽いほうが躯体への負担が軽くなる。

伝統的な束立てとか石場立てと言われる構法は、建物自体は基礎が直接、あるいは束が石の上の載っているだけなので、建物全体が壊れそうになるほど揺られると、建物自体が横滑りして倒壊を防いでくれる。だから地震の後や道路拡張に引っかけってしまったときには曳家つまり、建物ごと移動することができたのである。

このように、伝統的な構法は全体がシステムとして倒壊を防ぐようにできているのだ。それを部分的に補強しようとする、それ以外の部分に応力が集中して思わぬ結果を生んでしまうことになる。伝統的な構法は伊達や酔狂で何百年も継承されてきたのではない。常に創意工夫が重ねられて、段々と完成されてきたのである。

もちろん、ここに書いてきただけでなく、仕口や組み方にも多くの工夫が凝らされている。だからこそ、現在の構造力学で解析しようとするパラメータが多すぎて解析不能となっているのが現状のようだ。専門家にも解析不能である。だから許認可する立場からは許可できない。それが現行法の限界である。

だから、戦後に策定された基準法は、いわばミニマムな基準であったはずなのだが、いつの間にか、それだけ守れば大丈夫というスタンダードな基準となってしまった。熊本の大地震では現行法で認可された住宅すら倒壊した。地震の規模が想定を超えたのである。

### 一般建築の第一歩

一般建築の世界でも状況は変わらないが、新しい世界をつくろうという機運は高まり、1951年には坂倉準三は最近閉館した神奈川県立近代美術館を、谷口吉郎は慶應義塾大学第二研究室(新萬來舎)を完成させており、歌舞伎座復興計画は吉田五十八が設計した。

その翌年に「広島平和会館原爆記念陳列館」が完成。そして1955年には平和のシンボルともいえる「広島平和記念館本館」と公園が完成した。(続く)